

秋田における打合せ会議の記録

下村 潤 二 朗

カップ 128 J-S 型飛しょう実験の開始に先立ち、気象、警備および現地関係の 3 件について、それぞれの関係官民機関の代表者と、連絡、打合せを行った。その概要は次の通りである。

1. 気象関係

時：1956. 9. 20

場 所：秋田測候所

出席者：秋田測候所箱田所長、大久保業務課長、荒技術課長

生研糸川教授、下村事務官

概要：実験に必要な地上および高層の気象データの提供を依頼し、その協力が得られることになった。

1) 実験期間中、毎日 7 時、9.30 時、12 時、16.30 時、18 時の 5 回、天気図および天気予報を提供する。

2) 0 時と 12 時の定時ラジオ・ゾンデによる風向風速のデータを 7 時と 16.30 時に提供する。

3) 飛しょう当日は、6 時のレーウイン観測による高度 0 m~9 000 m の風向・風速を提供する。

4) 飛しょう当日は、測候所から専門員を秋田実験場に派遣し、現地の天候状況の判断に当る。

付記：秋田の 9 月下旬は季節の変わり目で、天候の変化がはなはだしく、糸川実験主任は、飛しょう日決定に天気図が大変有効であったといい、また高層気象データは、ロケットの飛しょう性能研究上役立つ。

2. 警備関係

時：1956. 9. 21

場 所：秋田クラブホール

出席者：秋田海上保安部畑部長外 6 名、秋田県警察本部富岡警部外 1 名、本荘警察署池端部長外 1 名、秋田鉄道管理局落合保線課長外 1 名、本荘保線区曾根区長、秋田県土木部姉崎技官
生研 糸川、丹羽、下村

概要：今次の実験計画概要を説明し、了解を得た後、海上および陸上の警備、危険区域の設定、告示方法等を協議決定した。

1) 警備：海上は秋田海上保安部の巡視船「みくら」、「とね」が警戒し、飛しょう当日は 8.45 時までに道川沖合に到着する。実験本部と巡視船との無電連絡に従事するオペレータ 2 名は、保安部より派遣する。飛しょう当日中止を実験班本部が決定する場合は 7 時までに連絡する等。

陸上警備は、本荘警察署より警官が出動し、これに警備員として実験班が用意する秋田大学学生を加え、万全を期する。

2) 危険区域の設定：ランチャー位置を起点とし、北

へ 670 m、南へ 580 m、東は防風土手を経て約 300 m の鉄道線路手前までとし、特に開放する特定日時以外は、実験場内への立入は禁止する。

3) 告示方法：飛しょう実験の実施日時の決定は、飛しょうを行おうとする前日の 3 時までに行い、秋田海上保安部、警察その他に実験班本部より報知する。秋田海上保安部は、NHK、ラジオ東北を通じて告示を行う。

飛しょう当日の警報および標識は、朝 黄旗を実験場土手柱上に掲げ、発射時刻 15 分前に B 旗（赤旗）を掲げ、かつサイレンを鳴らし、1 分前にのろしを打ち揚げる。終了時にのろし 2 発を打揚げ、B 旗、黄旗を下ろす。

付記：危険区域に関する原案は、南方警戒線を、勝手川沿いにわん曲したラインとしたが、県警察の見解から、海岸線に直角な垂線を勝手川最南側に引いた線が適当とされ、ランチャーより南 580 m の位置を警戒線に定め、実施結果から見てきわめて適切であった。

3. 現地関係（2 回開催）

時：1956. 9. 22 および 9. 27

場 所：岩城町道川支所

出席者：道川支所佐々木支所長外 9 名、三浦道川地区消防団長、大内亀田地区消防副団長、渡辺道川小学校長、今野道川中学校教諭、堀井道川郵便局長、小坂道川駅長、赤田下浜漁業組合長、三浦同副組長、今野上新谷部落会長、小林二古部落会長、佐々木勝手部落会長、堀井、今野内道川部落代表、帆川帝石部落総代理、石黒下浜小学校教頭、伊藤下浜支所書記

生研 糸川、丸安、丹羽、植村、下村

概要：秋田実験場所在の現地関係の官民と実験班との協議機関として道川協議会を設け、佐々木道川支所長代理を議長とし、実験計画の説明、危険区域の周知、警戒の要領に関する質疑等を行って、ロケット実験に官民の協力を得る外、漁業関係者、農家、住家等の要望事項を聴取し、相互に支障のできるだけないようにし、国家的事業達成をはかる懇談を行った。したがってこの会合では、特に漁業関係者から生業に関する具体的意見が提出され、実験班はその解決に努力した。なお今回の協議会には、出席できなかったが、この協議会のメンバーとして、加藤岩城町長、田口同町会議長、斎藤雪川部落会長、下浜中学校長、その他数名を加えることが議長より提案され、承認された。

付記：現地道川とこれに近接する下浜町から地方団体、学校、部落代表等の多数が、出席して実験班との相互理解を深め、協力し合う態勢を作ったことは、道川支所当局の尽力によるところ大で、今後の国際地球観測年における定常的観測の長期間実施に役立つところ大であると思った。

(1957. 1. 24)